

72	戦後の教育改革	148
73	第五福竜丸事件と原水爆禁止運動	150
74	マリアナ海域の漁船大量遭難	152
75	カツオ・マグロ漁業の変貌と水産加工業	154
76	大量生産大量消費の時代	156
77	焼津市のベッドタウン化	158
78	総合開発計画の展開	160
79	ものづくり焼津の文化施設	162

第7章 民俗

80	海蔵寺ものがたり	164
81	焼津神社の荒祭り	166
82	絵馬に込めた願い	170
83	海・里・山の年中行事	172
84	暮らしのなかの石造物	174
85	恵まれた海の幸	176
86	焼津の伝説	178
87	山のなりわい	180
88	平野のなりわい	182
89	地先と川の漁具・漁法	184
90	港周辺の産業	186
91	カツオ一本釣漁船	188

〈図説・年表の表記について〉

- ・本文の記述は原則として常用漢字・現代仮名遣いを使用した。ただし、固有名詞や特殊な用語については、必ずしもこの原則によらなかった。
- ・本文中の人名の敬称は、すべて省略した。
- ・年号は西暦を用い、必要に応じて日本年号を（ ）で示した。
- ・本文中の焼津市内の地名については、基本的には現在の住居表示にならないふりがなを付した。
- ・市（国・県）指定文化財については、市（国・県）指定と省略した場合が多い。
- ・城之腰・北浜通（旧北新田）・鯛ヶ島については、歴史的経緯を考慮して便宜上「焼津湊三ッ村」という総称、もしくは「浜通り」という通称を用いたところがある。
- ・本文の叙述には多くの研究成果を援用したが、本書の性質上、典拠を省略した場合が多い。
- ・掲載資料の所蔵者・提供者・撮影者については、巻末の一覧に記した。図・表の出典についてはそれぞれの説明文のなかに記した。
- ・一部、本文中の表現や引用した資料のなかに差別的な用語が使用されている場合がある。もとよりこうした不当な差別を容認するものではなく、差別根絶の立場からその事実を認識する意味で叙述・掲載をした。

92	鯉節製造技術の発達と職人の交流	190
93	思い出の水揚げ風景	192

第8章 文化財

94	焼津の神社	194
95	焼津の神社建築・民家・石造物	196
96	焼津の寺院	198
97	焼津の寺院建築	200
98	焼津の彫刻・絵画	202
99	焼津の工芸品・書跡・歴史資料	204
100	無形文化財・無形民俗文化財・天然記念物	206
●	昭和30年代 焼津 あこのころの記憶	208
●	焼津市周辺地図	210
	あとがき	212
	執筆分担	213
	掲載資料の所蔵者・提供者・撮影者一覧	214
	協力者一覧	216
	焼津市史編さん関係者名簿	217
	焼津市歴史年表	1

焼津市で、歴史的に古く格式の高い神社は、九二七年（延長五）完成の『延喜式』に記載された焼津神社（焼津）と那閉神社（浜当目）である。

焼津神社の祭神は日本武尊であるが、江戸初期に著された『総国風土記』では祭神は「市杵島比咩命」と記す。つまり、ここにははじめ市杵島姫命が祀られていたが、のちに国の権威も加わり日本武尊を祀る焼津神社が設けられたと推定される。那閉神社は焼津神社と同じく延喜式内社で、祭神は八重事代主命である。物部氏の勧請により当目山の山上に祀られたが、その後海沖の神ノ岩、海岸の御座穴、そして現在地に遷座したと伝える。当目山そのものが御神体であったという。

室町時代前後には村ごとに神社が建てられた。

しかし石脇村では一四九一年（延徳三）、地元の郷土原川家の屋敷神を村の神社とし、浅間社と称した。このような事例は、市内では少ない。

中里村では一六二九年（寛永六）、彦根藩主井伊直孝が当村で出生したと知り、氏神として若宮八幡宮を再建した。そのため一五七八年（天正六）創立の村社大井神社は境内社になった。

これ以外に古社として、現和田神社の地に鎮座した八幡宮（田尻）、加茂神社（八楠）、大井神社（大住）、大井八幡宮（二色）などがある。



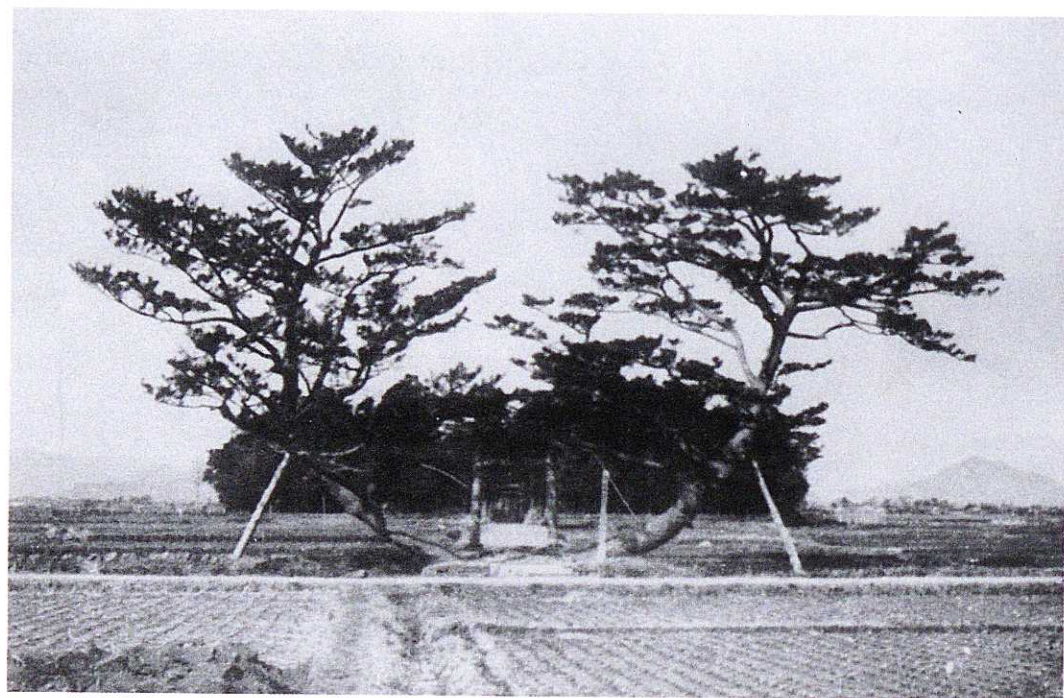
④那閉神社全景 後ろの山が当日山で、昔は社殿はなく山そのものが御神体であった。明治の神仏分離になるまで2月14日に筒粥神事を行っていたという。（焼津市浜当目）



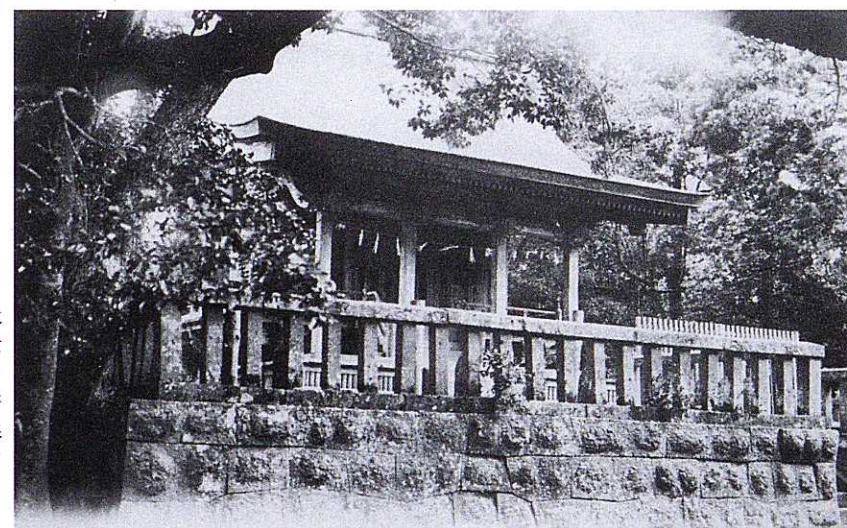
⑥大井八幡宮 11世紀中頃の永承年間に京都の石清水八幡宮より勧請して鳥社と称したが、1596年（慶長元）大井八幡宮と改称した。朱印高7石、除地2石。（焼津市一色）

⑤若宮八幡宮の棟札（市指定） 1629年（寛永6）作。書は寛永三筆の一人松花堂昭乗。棟札の本文は要約すると「井伊直孝は氏神として清浄な若宮八幡宮を再興した。これにより神徳の威は増し、武運長久は決然たるものなり」となる。棟札は檜の板で、縦152.2cm、横24.0cm厚さ3.6cm。（焼津市中里）

南瞻部洲大日本國東海道駿河邦山内並頭郡方上庄中里村
若宮八幡宮者依為直孝朝臣之氏神被拜興之 統業并荒廢之社壇營茲時清浄之神殿豈非神徳増廣乎
嘗非人主添運乎 諸宮各者宿正直之願庶信敬之心以之思之非復差序利主之安然則
大徳主 井伊掃部頭從五位上松花堂直孝朝臣式運長久之思也 齋子孫繁昌即從慶之安然也
寛永六年己丑三月吉辰
此外 坂内宿正直之願庶信敬之心以之思之非復差序利主之安然則
造字 井伊 直孝
上庄 中里



⑦明治末期の熊野神社と兜松 紀伊にのがれた小川城主長谷川氏が、1526年（大永6）熊野三社を勧請して帰り、小川の氏神として祀る。それ以前は那閉神社と称していたが、これを撰社とした。（焼津市東小川）



①明治末期の焼津神社の本殿 中世・近世には入江大明神社と称した。白装束の若者衆による神輿二基の渡御は“荒祭り”として有名である。（焼津市焼津）



③猿田彦面 猿田彦は荒祭りの四大神役の一つ。この面は1753年（宝暦3）天下第一出目石満作と伝える。（焼津市焼津／焼津神社）



②獅子頭 御神楽奉納の際に、獅子頭が神輿を清め神霊を振起させる所作を演ずる。これは4頭ある獅子頭のうちでもっとも古く、1402年（応永9）の作と記す。（焼津市焼津／焼津神社）

95 焼津の神社建築・民家・石造物

市内の神社本殿の構造形式をみると全体の半数以上が流造、四分の一が見世棚造。神明造四社、大社造一社である。そのうち、保福島の大井神社の本殿（一七八〇年〈安永九〉、一間社流造、柿葺）一棟が市文化財に指定されている。海に近く降雨時に風を伴うためであろうか、焼津神社の本殿、青木神社の本殿など規模の大きなもの以外は覆屋の内に納められている。現存する遺構のほとんどは江戸時代以降のもので、棟札によれば越後島の八坂神社の本殿が一六八三年（天和三）ともっとも古い。屋根は柿葺が一八社ともっとも多く、三ヶ名の神明宮、大島の八幡宮の二社は茅葺である。特殊な遺構として、大覚寺の八坂神社のように旧本殿と思われるものを内包しているものもある。焼津における民家の間取りは、旧市街の浜通りにおいては間口が狭く、片側が通り土間で一方に居室が並ぶ奥行の長いいわゆる町屋の造りで、平野部および山間部においては田の字型の整形四間取りが基本となる。現存するものは江戸時代末期以降のもので文化財に指定されているものはない。石造物は青緑色の玄武岩（通称当目石）が用いられているものが多く、香集寺の石燈籠、那閉神社の常夜燈、林叟院および成道寺の宝篋印塔、若宮八幡宮の石橋が市の文化財に指定されている。



⑥山竹家住宅 花沢の山間にあって、道路沿いに積み上げられた石垣上に付属屋が建ち、主屋は付属屋をくぐった敷地の奥まった位置に建つ。明治期の建築で、下屋を廻し平面は整形四間取り。(焼津市花沢)



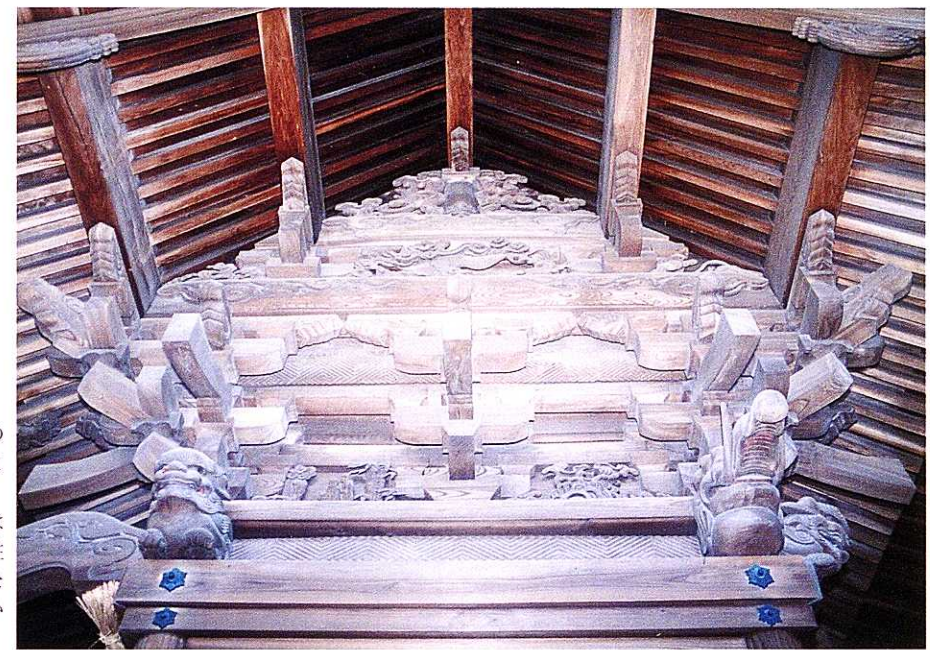
⑤吉井家住宅 駿河湾に面した海岸通りにあり贅飾製造を営んでいた吉井家住宅は、間口が狭く奥行の長い敷地に片方を通り土間、反対側に居室を縦列させたいわゆる町家建築。切妻造棧瓦葺、2階との連絡は箱階段を利用。(焼津市城之腰)



⑧若宮八幡宮の石橋（市指定） 1835年（天保6）6月、関方村の石工五左衛門によって架けられたもので、四隅の柱側面に架橋にかかわった人々の名を刻む。(焼津市中里)



⑦那閉神社の常夜燈（市指定） 元は浜当日集落の中ほどにあったが、大正年間に那閉神社の境内に移築。通称当目石（玄武岩）を使用し、1822年（文政5）信州高遠の石工によって造られたもの。(焼津市浜当日)



①大井神社の本殿（市指定） 1780年（安永9）、関方村の大工石田四郎兵衛の手により造営された一間社流造、柿葺の本殿。向拝の方柱は九帳面取菱模様の彫刻、円柱の本柱は胡麻殻決とするなど凝った彫刻が施されている。(焼津市保福島)



⑪成道寺の宝篋印塔（市指定） 1787年（天明7）、信州高遠の石工高馬幸右衛門の手により造立されたもので、軸石の4面に「寶」「篋」「印」「塔」の文字を刻む。林叟院のものとともに形式上は「宝塔」に属する。(焼津市一色)



⑩林叟院の宝篋印塔（市指定） 1791年（寛政3）の境内絵図には、本堂に至る石段を登った左側に5尺5寸四方、高さ1丈2尺宝篋印塔と記されている。造立年および現在地に移された時期は不詳。(焼津市坂本)



⑨香集寺の石燈籠（市指定） 当日山香集寺の境内に建ち、1625年（寛永2）の造立で市内に現存する最古の石燈籠とされる。火袋部分は風食の度合から後補のものと思われる。(焼津市浜当日)



④八坂神社の本殿 市内に八坂神社と称する社は3社あり、このうち大覚寺下の八坂神社本殿は1938年（昭和13）、大工梅原喜之助、飯塚兼吉らにより造営されたもので、旧本殿と思われるものを内包する特異な形式をもつ。(焼津市大覚寺)



③青木神社の本殿 市内唯一の大社造本殿で、1935年（昭和10）大工棟梁原川金次郎の手により造営されたもの。身舎平面は方2間、柱間寸法は出雲大社の3分の1で、正面右側に11級の本階を備える。(焼津市本町)



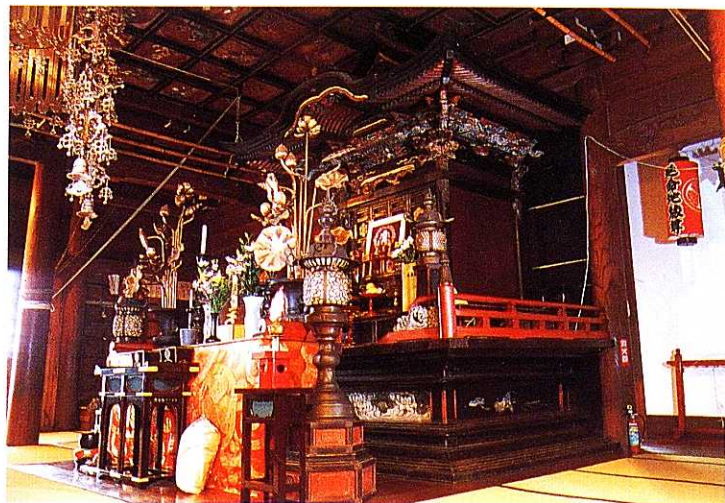
②若宮八幡宮の本殿 1928年（昭和3）に西益津村大覚寺上、大工飯塚兼吉らの手により再建された一間社流造銅板葺の本殿であるが、向拝彫刻・組物の内には前身の建物のものを再使用したと思われるものがみられる。(焼津市中里)

焼津市で古い寺院は、天台宗の法華寺(本尊・千手観音菩薩、天平年間創立、花沢)と真言宗の香集寺(本尊・虚空蔵菩薩、平安時代初期創立、浜当目)である。ともに祈祷を主にした山岳仏教である。その後、鎌倉新仏教があらわれ地方に普及していく。焼津では一四世紀初期に天台宗の安養寺(現在の海蔵寺(東小川))と普門寺(焼津)が時宗に改宗した。一五世紀中頃には天台宗の宝積寺(石脇下)が臨済宗となり、教念寺(東小川)が浄土宗として創立された。

一四七一年(文明三)、法永長者長谷川正宣は、曹洞宗石雲院(牧之原市)の高僧賢仲繁哲を招いて小川の浜辺に林叟院を創建し、二六年後に坂本へ移転した。ここを拠点に、曹洞宗の教線は拡大する。臨済宗の永豊寺(西小川)や真言宗の貞善院(焼津)、真言宗の古刹香集寺を曹洞宗に改め、弘徳院(野秋、のちに浜当目)などを創立した。

江戸時代には幕府は仏教を規制し、本寺の権限を強化し、庶民は寺の檀家になることを強制された。さらに焼津神社の神事を真言宗の長福寺の僧に勤めさせるなど神仏混淆を進めた。

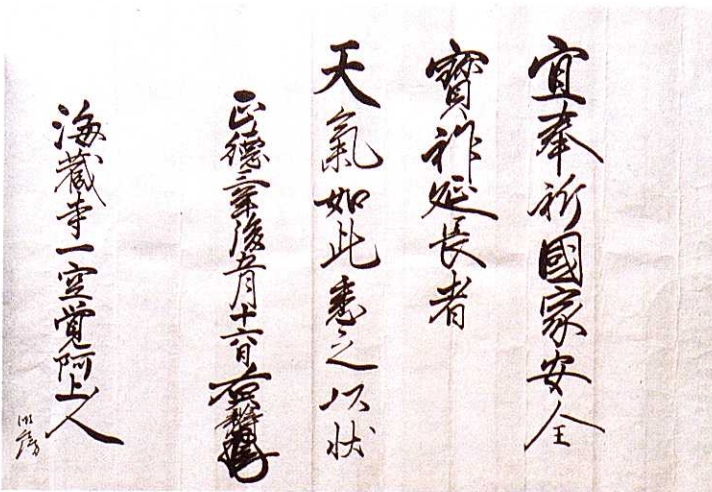
明治政府は神道を国教とする方針を定め、神仏混淆を禁止して、無住職の寺を廃止、土地令を出した。この結果の状態は現在もほぼ同様である。



③海蔵寺の内陣(市指定) 中央の本尊厨子は1780年(安永9)に紀州家から寄進されたもので、彫刻や彩色など華麗な装飾が施されている。(焼津市東小川)



④徳川頼宣の兜仏 像高3.9cm。頼宣の守り本尊(銅造地藏立像)で、軍中出馬の時も身から離さなかつたほどの尊像であったが、紀州入国の際海蔵寺へ譲られたと伝える。(焼津市東小川/海蔵寺)



⑤「中御門天皇論旨」 1713年(正徳3)に賜る。論旨とはみことりのことで、国家安穩の祈祷を命じている。海蔵寺は論旨5通を所蔵する。(焼津市東小川/海蔵寺)



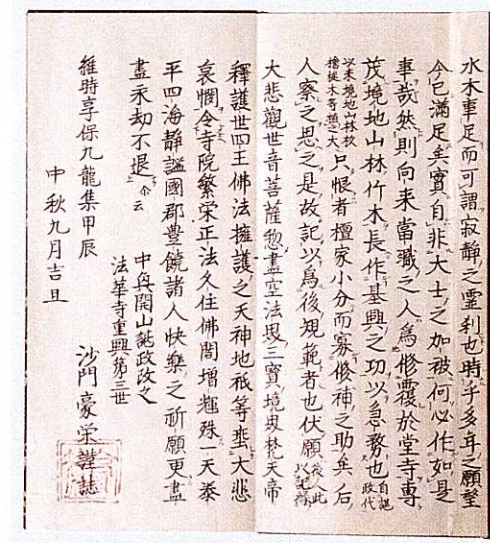
①法華寺の二十八部衆像 二十八部衆は千手観音の侍者である。法華寺では本尊千手観音の左右に二十八部衆を安置している。これらは1699年(元禄12)に奉納された。この時の住職は謀政法印である。像高は60cm前後で寄木造り、はじめは着色されていたが現在は色がほとんど失われている。(焼津市花沢)



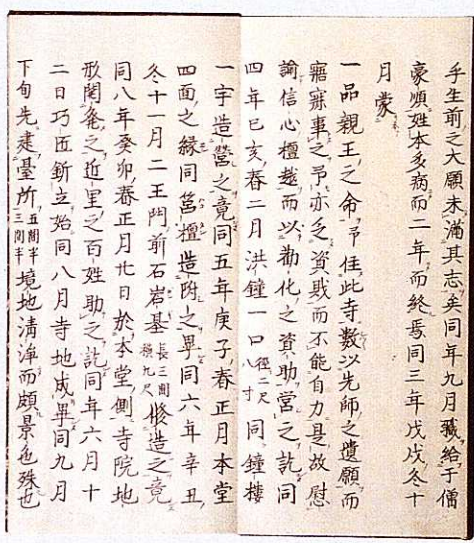
⑦寛政3年林叟院境内図 1791年(寛政3)の作図。建物の位置や規模が分かる。(焼津市坂本/林叟院)



⑥長谷川正宣(法永長者)夫妻の墓 右が法永長者正宣の墓で、正宣は林叟院の開基。子孫の旗本長谷川栄三郎正満が1802年(享和2)に再建した。(焼津市坂本/林叟院)



②「法華寺建立記」 1724年(享保9)法華寺住職豪榮が記す。法華寺は武田氏の兵火により諸仏以外を焼失した。元禄の頃焼津市八桶出身の住職謀政が東叡山寛永寺の命により本堂・仁王門などを完成させて法華寺を再興した。(焼津市花沢/法華寺)



97 焼津の寺院建築

焼津市の寺院の宗派別内訳は、曹洞宗四三カ寺、浄土宗五カ寺、時宗および日蓮宗が三カ寺、真言宗二カ寺、天台宗と臨済宗が各一カ寺で全寺院の七割以上を曹洞宗寺院が占める。これらの寺院建築のうち香集寺の仁王門・法華寺の仁王門・永豊寺の山門・林叟院の経蔵・林叟院の鐘楼・海蔵寺の本尊厨子が市の文化財に指定されている。

宝永および安政の大地震などで多数の寺院が被害を受けたなかで、本堂脇の碑文に元禄中期に建立されたと伝えられる法華寺の本堂は、一九〇五年茅葺を瓦葺に改め小屋組も変更されているが、小屋束を繋ぐ貫材に一九五五年（元禄八）に建てられたことを示す墨書が発見され、建立年代が判明している最古のものである。市内唯一の天台宗寺院で、内陣と外陣の境には格子戸を建て、外陣の三方は開放とし床は拭板張りとする。

坂本の山間に位置する曹洞宗の林叟院は境内伽藍も整い、一八〇八年（文化五）再建と伝えられる本堂は、外陣および室中の東側に二室を配した八間取りとする。時宗の海蔵寺の本堂は梁間五間のうち前面二間を外陣とし、内陣との境に格子戸を嵌める。外陣正面中央には両折棧唐戸を釣り、両脇を藩戸とする。浄土宗の教念寺の本堂は外陣を一室とし、内陣両脇に脇陣を配する。



⑦法華寺の本堂 元は茅葺であったが1905年（明治38）に瓦葺に変更されるにつき小屋組も改変、建立時期を示すものは無いと思われたが、貫材の一部に墨書が見つかり、1695年（元禄8）に建てられたものであることが判明した。（焼津市花沢）



⑥永豊寺の山門（市指定） 1769年（明和6）、三ヶ名の中島重右エ門が寄進、藤枝宿木町の大工仁左衛門らにより建立されたと伝えられる茅葺葉門。1983年（昭和58）大規模な修理が行われた。（焼津市西小川）



⑤林叟院の鐘楼（市指定） 1844年（天保15）、26世祖海徹宗師代、藤枝白子町の大工棟梁桑原清七郎らの手により再建された袴腰付鐘楼。棟札には施主越後島村甲賀伊兵衛、世話人下大覚寺村伊東清次郎ら4名が名を連ねる。（焼津市坂本）



⑨法華寺の仁王門（市指定） 1703年（元禄16）再建と伝えられる入母屋造銅板葺八脚門。元は茅葺であったといわれるが現状の姿になった時期は不詳。柱頭大斗上枅肘木には不自然な埋木もあり、改変の跡がみられる。（焼津市花沢）



⑧香集寺の仁王門（市指定） 建立年代ははっきりしないが江戸時代末期に著わされた『駿國雜志』中の「當日山之圖」には、入母屋造の「二王門」と記されていることから現在の門はそれ以降に改修または再建されたものであろう。（焼津市浜当日）



②林叟院の本堂 1808年（文化5）の再建と伝えられる8間取りの本堂で、元は茅葺であったが1957年（昭和32）瓦葺に改められた。正面大縁の上間部分がかつては庫裡および禪堂に通じていた。（焼津市坂本）

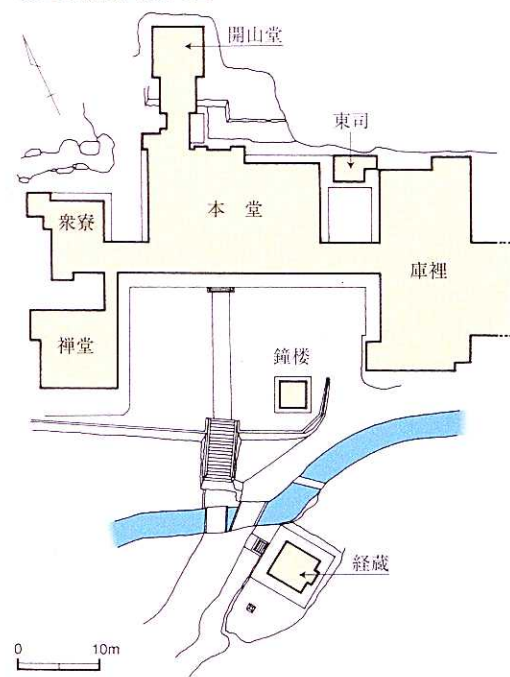


①林叟院の経蔵（市指定） 1771年（明和8）、20世心牛相印師代に工匠石川市之丞らの手により建立されたと伝えられる。堂内に平面八角形の輪蔵を建て、正面の軒下に「遺詠堂」の額を掲げる。軒隅斗拱には特徴ある鬼斗を置く。（焼津市坂本）



④林叟院の禪堂 1728年（享保13）の再建といわれ、寛政3年の境内絵図には5間四方、高さ1丈2尺茅葺の僧堂として記されている。堂内正面に文殊菩薩像を祀る。正面入口虹梁上に「選佛場」の額を掲げる。（焼津市坂本）

③林叟院境内配置図



⑪海蔵寺の本尊厨子（市指定） 1780年（安永9）に紀州徳川家より寄進されたものと伝えられ、軒唐破風付の正面に葵紋付両折棧唐戸を建てる。軒は二軒築垂木、波頭模様の尾垂木を出した二手先斗拱とする。（焼津市東小川）



⑩海蔵寺の本堂 現存の本堂は安政の地震直後の1860年（万延元）に建てられたものと伝えられる。紀州徳川家の掃依篤く、正面の両折棧唐戸には葵紋を刻む。軒は尾垂木を出し、二手先斗拱を組む。（焼津市東小川）

彫刻 焼津市内に現存する彫刻で古いものとして法華寺の聖観音立像(県指定)がある。天台宗や真言宗の寺院には古い仏像が伝わっていることが多いが法華寺も天台宗である。この仏像は法華寺の奥の院・東照寺の本尊であったと伝える。元禄年間(今から三〇〇年前程)に法華寺を再興した謀政によって、この地に移されたものであろう。

絵画 絵画も仏教の教えにかかわる作品には古いものがある。絹本墨画淡彩芦葉達磨図(国指定)は禅宗の初祖・達磨を描いたものである。達磨はインドに生まれ、中国にわたって禅宗を広めた。インドから中国に来る時、芦葉に乗ってきたという伝説があり、その様子を図にしたものである。鎌倉時代の貴重な水墨画である。紙本着色一遍上人縁起絵(断簡、市指定)は鎌倉時代の時宗の開祖・一遍の物語を描いた巻物の一場面である。

また、香集寺と海蔵寺には絵馬の扁額が伝わっている。これは画家、奉納者などが一致し江戸時代前期の貴重な絵画作品であるとともに地域の歴史が知られる資料である。いずれも一六六七年(寛文七)、狩野元俊の作で田中城主西尾忠昭(忠照)の弟・忠知の奉納である。



③一遍上人縁起絵(断簡、市指定) 1幅、縦22.0×横44.3cm。筆者は不詳であるが一遍が熊野本宮において熊野権現から神託を受けている場面を描く。一遍上人(1239-1289)は鎌倉時代の時宗の開祖。絵の具の剥落が激しいが一遍の事跡の一場面である。(焼津市東小川/海蔵寺)



④香集寺の絵馬(市指定) 江戸時代前期(1667年(寛文七))、狩野元俊筆、縦88.0×横152.0cm。板絵金地墨画、扁額。田中城主西尾忠昭の弟・忠知が奉納。力強く足踏みする黒い馬を画面いっぱいに描く。墨書により虚空蔵尊に奉納した経緯がわかる。(焼津市浜当目)



⑤海蔵寺の絵馬(市指定) 江戸時代前期(1667年(寛文七))、狩野元俊筆、縦86.5×横152.0cm。板絵金地墨画、扁額。作者や奉納の経緯は香集寺の絵馬とほとんど同じで10日余り後の奉納。白い紙つぶてにより画面が損なわれている。(焼津市東小川)



②絹本墨画淡彩芦葉達磨図(国指定) 1幅、縦111.0×横41.0cm。鎌倉時代後期。芦葉に乗る達磨を描く。筆者については不明であるが画上に中国の僧・一山一寧の賛がある。目の粗い細に水墨で達磨を描き、芦葉にわずかに緑色がみられる。(焼津市一色/成道寺)



①木造聖観音立像(県指定) 1軀、像高169.2cm、平安時代後期、木造漆箔。ほぼ等身で冠をいただき右手を立て、左手には蓮華を持つ。松材で一部ははげているが金箔が施されている。穏やかな顔つき、整った衣紋など平安時代後期の特色を示す。(焼津市花沢/法華寺)

99 焼津の工芸品・書跡・歴史資料

工芸品

工芸品は木工・金工・漆工・染織品などさまざまな材質を使って作られた生活のなかで用いる品である。成道寺の百萬塔は法隆寺（奈良県奈良市）ゆかりのもので奈良時代の貴重な木工品である。小さな塔の中には日本で最初の木版のお経が納められ、それも伝えられている。海蔵寺の厨子は本尊の仏像を納めるものであり、御戸帳はその厨子の前に掛けるものである。これは歴史資料としての市の指定文化財になっている。染織品の工芸品としても見事な錦の織物である。普門寺の半鐘はやや小ぶりなもので、寺院で時を知らせる道具として貴重なものである。

書跡

書跡とは墨で書かれたものであるが、紙に書かれたものは失われることも多く、保存するために書を板に彫り額などにしたものもある。若宮八幡宮の棟札は江戸時代前期の制作で、当時の著名な書家・松花堂昭乗（一五八四—一六三九）の書を板に彫りこんだものである。若宮八幡宮の創立された由来などが記されており歴史資料としても貴重である。このほか、江戸時代の遊行僧・木喰上人の書や彫刻も残されている。その他、坂本貞次・駒井勝盛連署状、徳川家康朱印状、今川氏真朱印状が市指定文化財である。

⑦大日堂の不動明王像（市指定） 1軀、像高94.0cm、江戸時代後期（1800年・寛政12）。木喰は大日堂に3体の彫刻を残したが大日如来像は行方不明。円筒形の本に火炎を背に負った不動を一体となるように彫刻している。背の墨書によると7月23日の作。（焼津市石脇下）



⑥大日堂の吉祥天像（市指定） 1軀、像高94.0cm、江戸時代後期（1800年・寛政12）。江戸時代の遊行僧・木喰行道作。木喰上人は甲斐の山里・丸畑（山梨県身延町古閑丸畑）に生まれ、14歳で家を出て諸国をめぐり各地に仏像を残した。簡潔な彫りの作品。（焼津市石脇下）

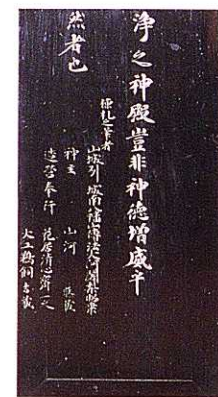


①成道寺の百萬塔（市指定） 1基、総高21.2cm、奈良時代、木製。なかの空洞部に陀羅尼経1巻を納める。称徳天皇が770年（宝亀元）に奈良の10ヶ寺に10万基ずつ奉納したことから百萬塔と呼ばれる。（焼津市一色）



②貞善院の鱈口（市指定） 1口、直径22.2cm、江戸時代（1686年・貞享3）、青銅製。寺院の軒下に掲げ参拝者が打ち鳴らすもの。形がワニの口に似ていることから鱈口と呼ばれる。刻銘があり、奉納の経緯がわかる。（焼津市焼津）

⑤若宮八幡宮の棟札（市指定） 1枚、総高152.2cm、厚さ3.6cm、江戸時代前期（1629年・寛永6）、木製。桧材の黒漆塗りの板に文字が彫り込まれ、若宮八幡宮が彦根藩主により建立されたことがわかる。（焼津市中里）



（部分）
* 全国は項目94参照。



（表と裏）



③普門寺の半鐘（市指定） 1口、総高60.0cm、江戸時代（1685年・貞享2）、青銅製。半鐘は小型の釣鐘で緊急時の合図に使われるが時を知らせるのにも使用。元焼津の村松庄兵衛が亡き母の菩提を弔うために普門寺に寄進。（焼津市焼津）

④海蔵寺の御戸帳（市指定） 1張、縦130.5×横101.5cm、江戸時代（1777年・安永6）。厨子の前に掛ける錦の帳で裏面に奉納した経緯が墨書されている。田中城主の本多正供が亡き母の追悼のために奉納。（焼津市東小川）



⑨宝積寺の地藏菩薩像（市指定） 1軀、像高77.0cm、江戸時代後期（1800年・寛政12）。油煙で真っ黒くすすけている。丸々とした顔にはふくよかな笑みがみられ、木喰独特の表情である。頭光の彫りもしっかりしている。高草山西麓には比較的長く滞在した。（焼津市石脇下）



⑧勢岩寺の弘法大師像（市指定） 1軀、像高16.8cm、江戸時代後期（1800年・寛政12）。木喰は庶民には居室に安置する小さな仏像を制作して渡している。この像もおそらくはそうしたものの一つであろう。各部分の彫りは丁寧になされている。（焼津市石脇下）

無形文化財・無形民俗文化財・天然記念物

無形文化財

無形文化財とは、演劇・音楽・工芸技術その他の無形の文化的所産で、

いわゆる人間国宝などと呼ばれている人たちの技能である。焼津市では、焼津鯉節製造技術・弓道具製作技術・焼津笠製作技術が市の無形文化財に指定されている。これらはいずれも生業にかかわる生産技術で、焼津市に伝わる貴重な伝統技術であり、地域的な特色をもったものである。

無形民俗 無形民俗文化財とは、人々の生活の文化財 推移の理解に欠かせないもので、風俗習慣・民俗芸能・民俗技術などである。焼津市では焼津神社獅子木遣りが県指定、関方の山の神祭りが市指定の文化財になっている。また、焼津神社の獅子木遣りと神ころがしは国の記録作成等の措置を講ずべき文化財として選択を受けた。

天然記念物

天然記念物とは、動物・植物および地質鉱物で学術上価値の高いものである。地域的特色を持った自然が失われつつある今日、私たちをとりまく環境の変化を知る指標として、その変化には気を付けなくてはならない。焼津市では価値あるマツなどの植物が市の指定になっている。猪之谷神社のナギの木・林叟院のホルトの木・臥竜の松・旭傳院の松が市の天然記念物に指定されている。



①焼津鯉節製造技術 (市指定) 鯉節を製造する技術。この技術は江戸時代後期に開発されたと考えられ、土佐、伊豆を経て焼津に伝わったといわれる。



②弓道具製作技術 (市指定) 「矢製作」、「弓懸製作」(弓を射るとき弦で指を痛めるのを防ぐための皮の手袋)、「巻薬」(練習用的)などの製作技術がある。



③神ころがし (国選択) 焼津神社の大祭中(8月12日)、早朝より昼前後まで拝殿前で行われる。氏子になる加入儀式であったともいわれる。(焼津市焼津)



④焼津神社獅子木遣り (県指定) 例年8月13日の大祭中に2頭の獅子の運びに合わせて手古舞姿の少女たちによって歌われる。



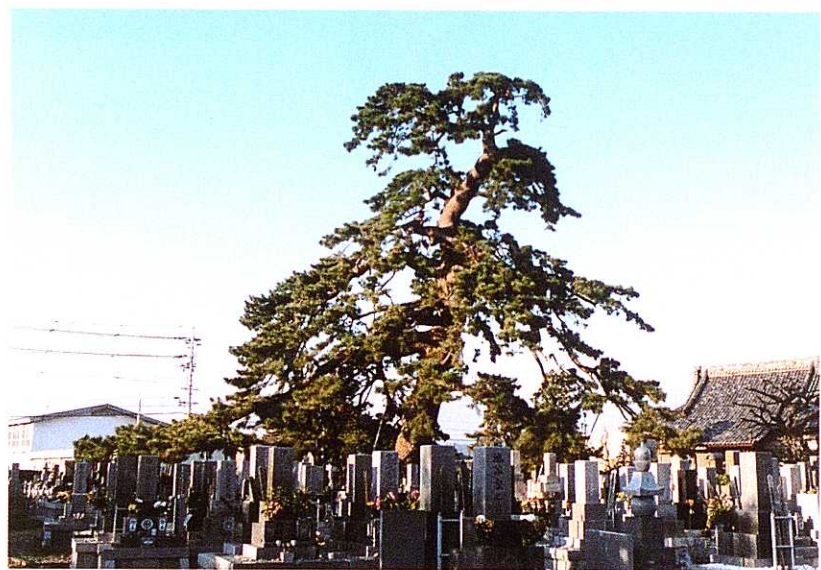
⑤関方の山の神祭り (市指定) 関方地区で毎年2月8日に行われる山の神を田に迎え、豊年満作を祈る神事。(焼津市関方)



⑥猪之谷神社のナギの木 (市指定) 目通り2.25m、根回り2.6m、樹高16m、枝張り5m。猪之谷神社拝殿の前にある。樹勢は旺盛でメスの樹である。(焼津市関方)



⑦臥竜の松 (市指定) 目通り1.2m、根回り1.4m、樹高5m、枝張り(最長)20m。クロマツ。その名称のとおり竜が横たわっているような長大な枝を伸ばしている。(焼津市保福島)



⑧旭傳院の松 (市指定) 目通り4.3m、根回り5.5m、樹高25m、枝張り20m。クロマツで樹勢は旺盛。古木で樹高も高く見事である。(焼津市保福島)



⑨林叟院のホルトの木 (市指定) 目通り2.6m、根回り4m、樹高20m、枝張り10m。樹勢は旺盛。亜熱帯原産、静岡県下では珍しい。常緑高木、オリブの別称。(焼津市坂本)